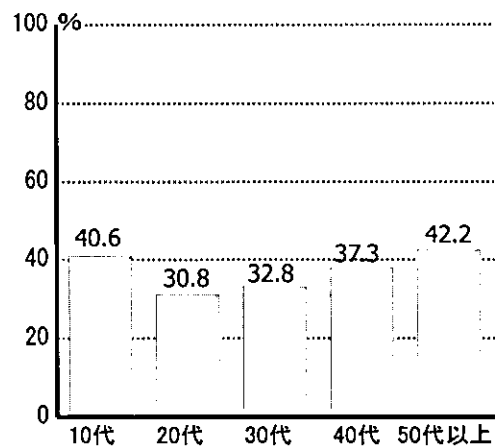


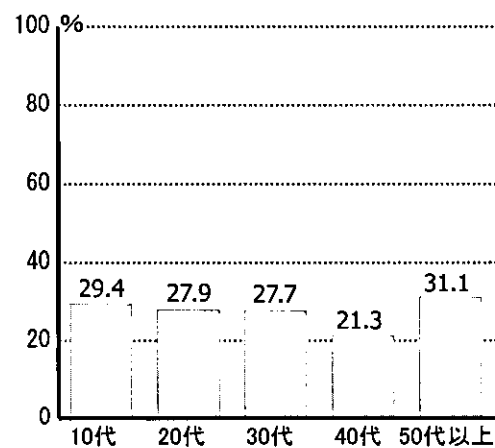
うな状況によって、セックスを通じて相手とより結びつきたいという思いが強まり、それが反映された結果として40代以上の人の中にも、上記のように思う人の割合が高いとも考えられます。

またその一方、「コンドームを使うと、気まずい感じになるのではないかと不安に思うこと」がある人の割合は、21.3～31.1%であり、年齢階級と有意な関連はありませんでした。つまりどの年齢層においても2割～3割の人のみが、コンドームを使うと気まずい感じになるのではないかと不安に思うだけで、大半の人はそういった不安は感じていないと言えます。「コンドームを使っても気まずい感じにならない人が多いですよ」というメッセージを広く流通させることで、コンドーム使用に対してポジティブな意味づけを積極的に行っていくことができるかもしれません。

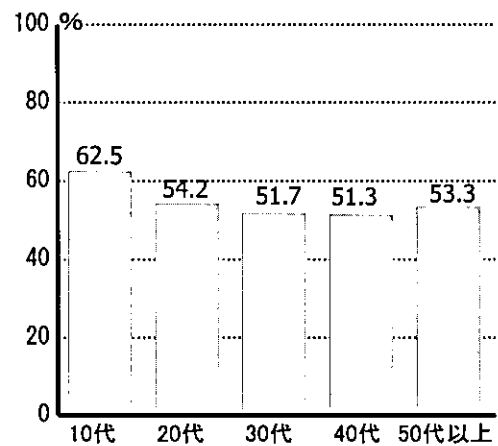
コンドームは相手との距離感を感じさせるものだと思うこと



コンドームを使うと、気まずい感じになるのではないかと不安に思うこと

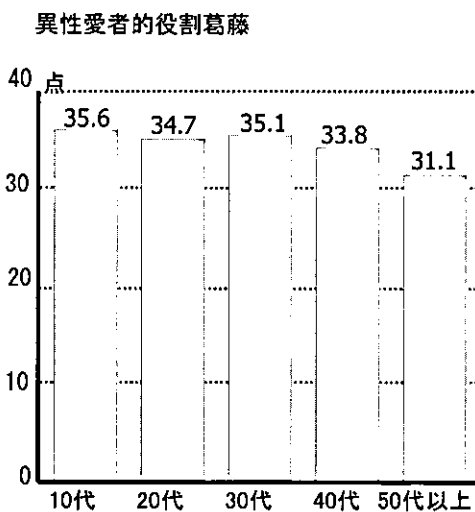
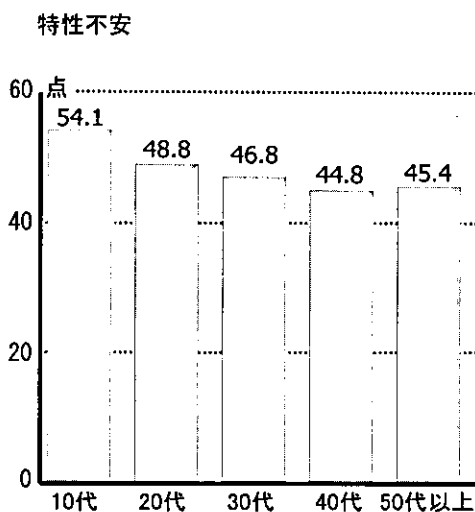


好きな相手だから、コンドームを使いたくないと思うこと



# 11. 精神的健康の実態

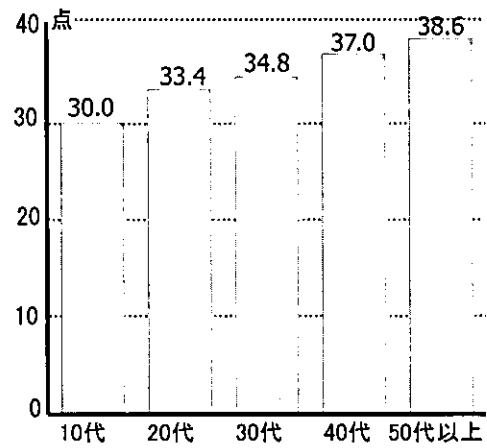
## ①年齢階級と精神的健康



精神的健康の実態を把握するために、それぞれの心理尺度の平均値を年齢階級別に求め、比較する試みを行いました。その結果、特性不安尺度、異性愛者の役割葛藤尺度、自尊心尺度、抑うつ尺度の年齢階級別の平均値は、若年者の方が年齢が上の人と比べると特性不安度合いは高く ( $P<.001$ )、異性愛者を装う時の心理的葛藤は強く ( $P=.046$ )、自尊心は低く ( $P<.001$ )、抑うつ度合いは高い ( $P<.001$ ) ことが示されました。つまり精神的健康状態は若年層の方が悪化傾向にあります。年齢が上がるにつれて少しずつ良くなっていることがわかりました。10代～20代といった若年時はゲイ・アイデンティティの確立やカミングアウトに関わる問題や社会的に適應するために懸命になること、あるいはゲイ・バイセクシュアル男性としての社会的な役割モデルが目に見える形でなかなか存在しないことなど、複合的かつ様々な要因が折り重なって精神的健康の悪化につながっているものと考えられます。とりわけ特性不安の度合いは高く、どの年齢層の平均値も高不安群と考えられる基準値である44点を上回っていました。40代～50代になってやっとこの基準値(カットオフポイント)の44点に近づきますが、全体の64.2%が高不安群であり、これはゲイ・バイセクシュアル男性の「先の見通しのつかない不安」の強さを現していると考えられます。

また、異性愛者を装うときの心理的葛藤も、10代～30代は40代以上に比べると高い傾向であり、異性愛者としての伝統的な性別役割や結婚のプレッシャーなどが強い時期だと言えるのではないのでしょうか。しかしそういった葛藤も年齢が上がるにつれて軽減されている

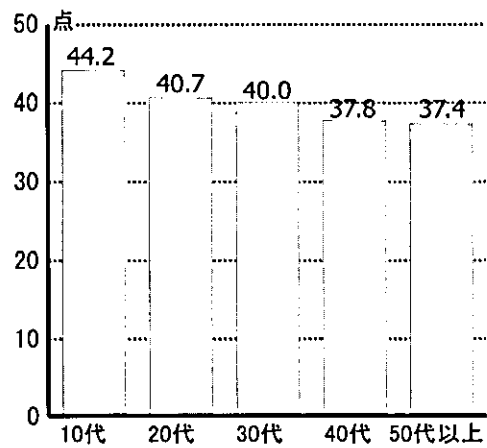
### 自尊心



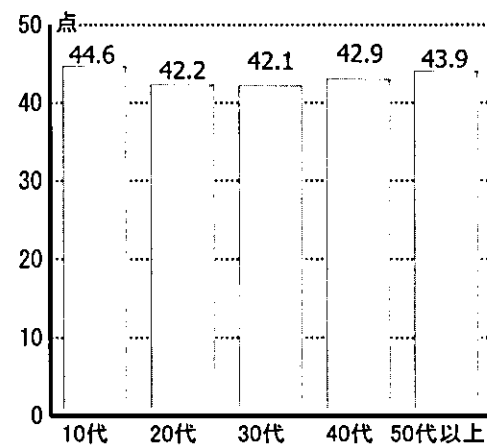
傾向にあり、周囲からの役割期待やそれを意識した役割演技からも解放されつつあるのが40代以上と言えるかもしれません。

特性不安尺度、異性愛者的役割葛藤尺度、自尊心尺度、抑うつ尺度の平均値は年齢階級と有意な関連がありました。孤独感尺度は関連がありませんでした ( $P=0.167$ )。つまり10代～50代以上までを通じて、どの年齢層も比較的同程度に対人関係に起因する孤独感を感じていると言えるでしょう。

### 抑うつ

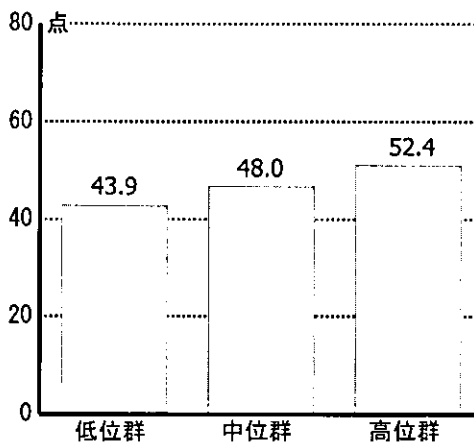


### 孤独感

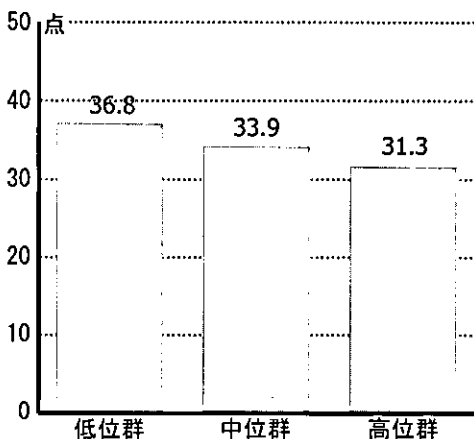


## ② 異性愛者的役割葛藤と精神的健康

異性愛者的役割葛藤の程度と  
特性不安尺度得点



異性愛者的役割葛藤の程度と  
自尊心尺度得点



異性愛者的役割葛藤尺度

- ①「結婚話」をすすめられたとき
- ②「孫の顔が早く見たい」と言われたとき
- ③彼女いないの？と聞かれ、適当に話を合わせているとき
- ④テレビの「ホモネタ」を見て、周囲の反応に合わせているとき
- ⑤彼氏のことを彼女に置き換えて話しているとき
- ⑥イけている男性を見て、「この人格がいい」と友達の前で言えないとき
- ⑦ゲイの交友関係のことを気軽に話せないとき
- ⑧彼氏とおしゃれなレストランへ行き、周囲の目を気にするとき
- ⑨ゲイ雑誌を堂々と買えないとき
- ⑩「男は強くたくましくあるもの」という考えを聞かされたとき
- ⑪低い声で「男らしく」話しているとき
- ⑫女の子に囲まれ、「両手に花だね」と言われたとき
- ⑬女性から好きだと言われ、嘘をついたり話をそらすとき
- ⑭興味がない女性のことを、興味があるような言い方を自分がしているとき
- ⑮女性が接待してくれるお店に「付き合い」で行くとき

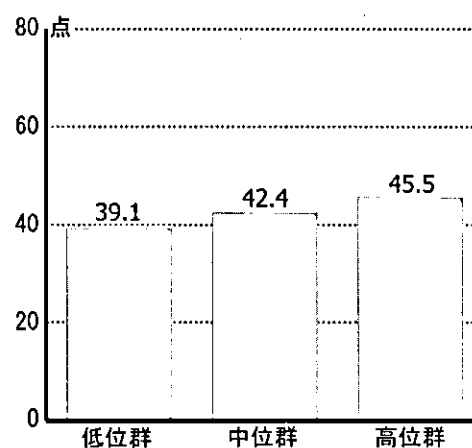
異性愛者を装う時の心理的葛藤の強さを測定した異性愛者的役割葛藤尺度の得点分布を三分割し、役割葛藤低位群、中位群、高位群と三群化しました。その上で、特性不安尺度、自尊心尺度、孤独感尺度、抑うつ尺度との関連を分析しました。

異性愛者的役割葛藤の程度が強い人ほど特性不安、抑うつ、孤独感の度合いは強く、自尊心は低下している現状が示されました ( $P < .001$ )。

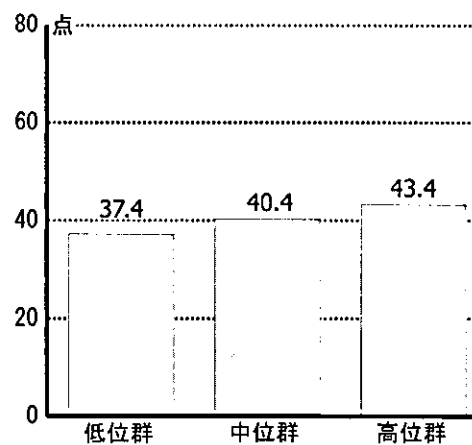
これらの結果は、異性愛者社会においてゲイ・バイセクシュアル男性が「異性愛者」として社会的に適應するために奮闘し、その結果異性愛者を装う時に心理的葛藤を強く感じ、その葛藤の程度と精神的健康状態に有意な関連があることを示していると言えます。異性愛者役割を奮闘する背景には、異性愛中心文化の中では異質な存在である自らの性的指向が周囲に知られてしまうと、社会生活を送れなくなるのではないかと、親を傷つけるのではないかなど様々な苦悩があることが容易に推察されます。

こうした状況を鑑みると、ゲイ・バイセクシュアル男性がカミングアウトまでしなくとも、少なくとも積極的に異性愛者を装わなくてもすむような社会になっていくことが必要であると考えられる一方、そのような社会の変容はすぐには望めないという現実もあります。まずは異性愛者として過剰に適應する努力をしてストレスを蓄積することがないよう、ストレス・マネジメントに取り組むこと、あるいは自分自身の精神的健康状態について心理カウンセリングを利用して振り返り、回復を図る作業もゲイ・バイセクシュアル男性にとって必要な場合もあるでしょう。

異性愛者的役割葛藤の程度と孤独感尺度得点



異性愛者的役割葛藤の程度と抑うつ尺度得点



## 12. HIV 感染予防行動と精神的健康の関連

HIV 感染予防行動=コンドームを使うことと精神的健康状態の関連を分析しました。分析にあたって、過去6ヶ月間のセックスの相手（特定のみ、不特定のみ、特定・不特定の両方）とアナルセックスの種別（挿入のみ経験者、被挿入のみ経験者、挿入・被挿入両方経験者）をクロス集計しました。その上で、各セルごとにコンドーム使用群（必ず使った+使うことが多かった）と不使用群（5分5分の割合で使った+使わないことが多かった+使わなかった）に二群化した上で、コンドーム使用群と不使用群の心理尺度得点の平均値を比較しました。

過去6ヶ月間に被挿入のみ+特定の相手のみ群のコンドーム使用者は不使用者と比べると、異性愛者的役割葛藤尺度得点が有意に高く( $P=0.027$ )、同様に挿入・被挿入両方+特定の相手のみ群のコンドーム使用者も不使用者に比べて異性愛者的役割葛藤尺度得点は有意に高いことが示されました。これらのことから特定の相手のみで被挿入経験がある人のコンドーム使用者はコンドーム不使用者に比べると異性愛者を装うときの心理的葛藤（役割葛藤）を強く感じているということが示唆されたと言えます。

また、過去6ヶ月間に被挿入のみ+特定・不特定の相手両方群のコンドーム不使用者はコンドーム使用者に比べると自尊心尺度得点は有意に低いことがわかりました( $P=0.043$ )。

そして、HIV 感染予防行動=コンドームを使うことと精

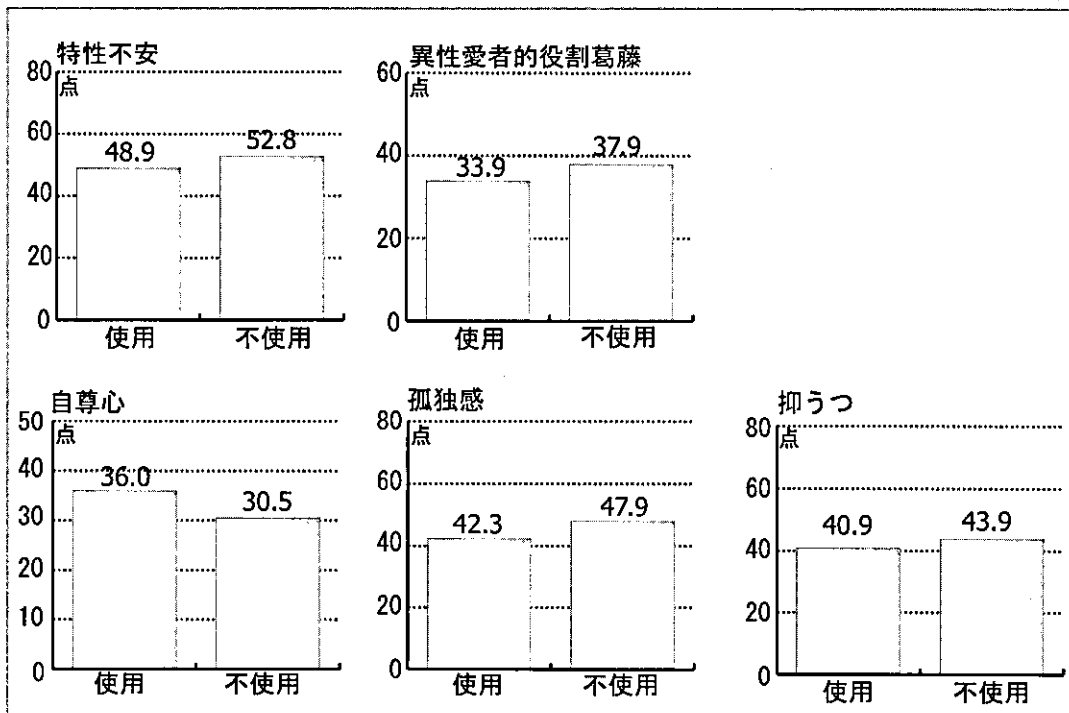
神的健康の関連が最も顕著に示された群は、過去6ヶ月間に被挿入のみ+不特定の相手のみ群でした。過去6ヶ月間に被挿入のみ+不特定の相手のみ群のコンドーム不使用者はコンドーム使用者に比べると、異性愛者的役割葛藤尺度得点は高い傾向にあり( $P=0.063$ )、自尊心尺度得点は有意に低く( $P=0.004$ )、孤独感尺度得点は有意に高い( $P=0.029$ )ことが示されました。

これらのことからコンドーム使用を阻害する心理的要因として、異性愛者的役割葛藤、自尊心、孤独感があることが示唆されたと言えます。特に被挿入のみ+不特定の相手のみ群においては、孤独感の強さとそれを埋め合わせたいという思い、自尊心の低さとそれを補おうとする思い、異性愛社会におけるストレスを吐き出したい、あるいはそのようなストレスによって自暴自棄になってしまうなどといった心の動きと、アナルセックスにおいてコンドームが使われないことが関連していると考えられます。

アナルセックス経験者のセックスの相手の種別と挿入・被挿入のクロス集計表 1,346人

	挿入のみ	被挿入のみ	挿入と被挿入両方
特定のみ	75人	84人	188人
不特定のみ	112人	108人	221人
特定と不特定両方	120人	114人	325人

被挿入のみ+不特定のみ群におけるコンドーム使用と精神的健康の関連



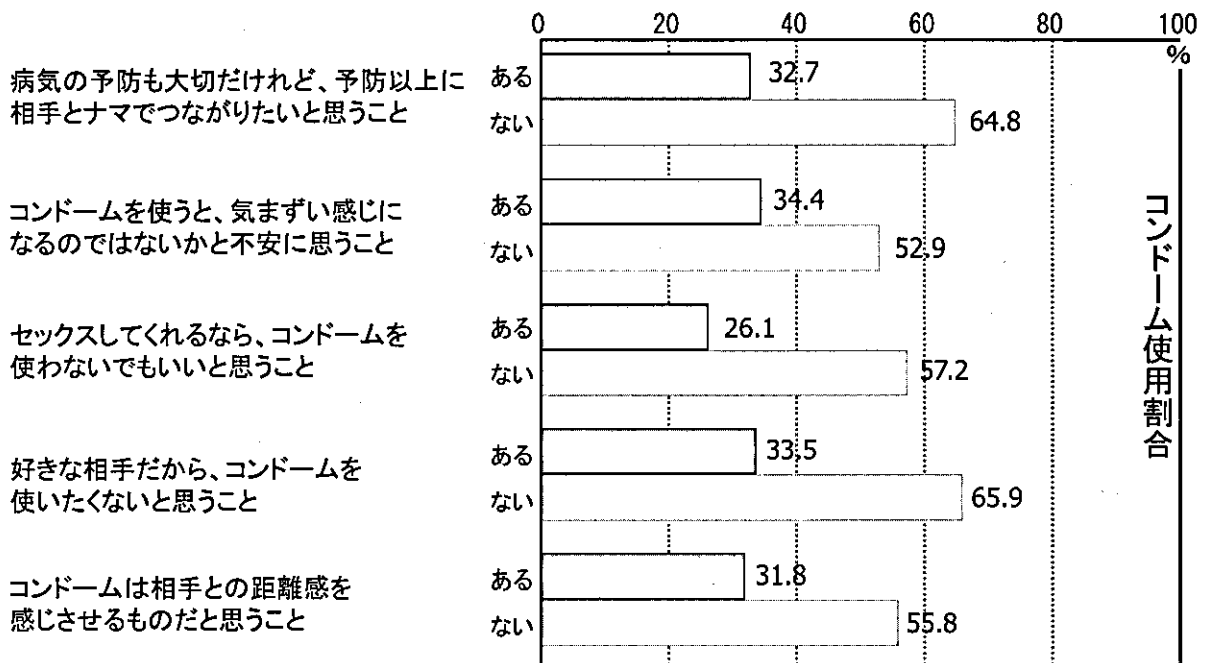
# 13. HIV 感染予防行動とセックスに 投影される心理

過去 6 ヶ月間にアナルセックスの経験があった人 (1,346 人) のコンドーム使用状況に応じて、コンドーム使用群 (必ず使った+使うことが多かった) と不使用群 (5分5分の割合で使った+使わないことが多かった+使わなかった) に二群化しました。その上で、セックスに投影される心理とコンドーム使用の関連について分析したところ、「病気の予防も大切だけれど、予防以上に相手とナマでつながりたいと思うこと」「コンドームを使うと気まずい感じになるのではないかと不安に思うこと」「セックスしてくれるなら、コンドームを使わないでもいいと思うこと」「好きな相手だから、コンドームを使いたくないと思うこと」「コンドームは相手との距離感を感じさせるものだと思うこと」といった全ての項目がコンドーム使用状況と有意な関連がありました ( $P<0.01$ )。

これらのことから、セックスに心理的なことを投影している人のコンドーム使用割合は、心理的なことを投影していない人のコンドーム使用割合と比較すると、有意にその割合が低いということがわかりました。コンドームを使用することよりもセックスの相手との関係性が優先される、またコンドームがセックスの相手との親密さを阻害することがあると感じられていると言えるでしょう。あるいはコンドームを使わないことで、相手とつながりたい自分の気持ちを積極的に行動で表そうとしているとも考えられます。

コンドームを使わない背景にはこのような心理的な理由があるからこそ、選択的にコンドームを使わない現状があるものと考えられます。

セックスに投影される心理とコンドーム使用の関連(アナルセックス経験者)



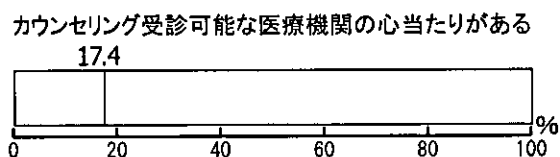
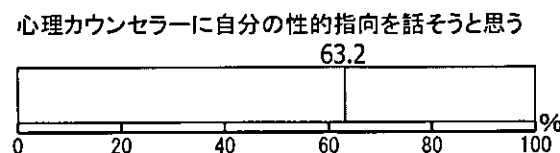
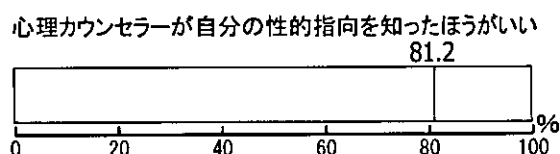
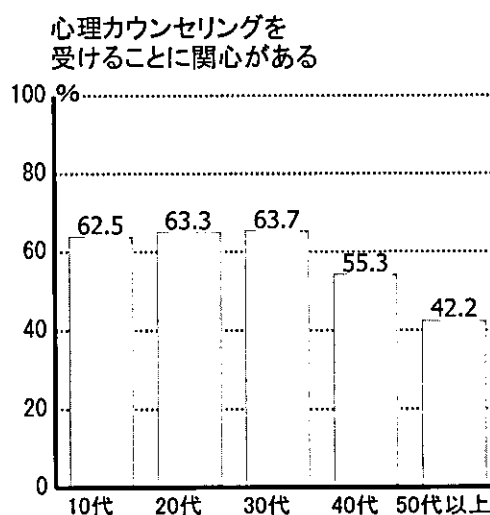


# 14. 心理カウンセリングのニーズ

心理カウンセリングを受けることに興味がある人の割合は全体の62.1%、年齢階級別では42.2%～63.7%であり年齢階級と有意でした(P=0.019)。居住地別の分析では51.3%～67.6%とであり、地域差はありませんでした。また、心理カウンセリングを受けることに興味がある人の80%以上が、心理カウンセラーは自分の性的指向を知った方がいいと考えており、63%の人が自分の性的指向を心理カウンセラーに話そうと考えています。しかしその一方、心理カウンセリングを受けることに興味がある人(1,281人)の中で、「心理カウンセラーに会って話ができる医療機関の心当たりがある」人の割合は17.4%でした。

つまり、地域は問わず比較的若年層の半数以上の人が心理カウンセリングを受けることに興味があること、心理カウンセラーに性的指向を話そうと考えている人が比較的多いことが示された一方、実際に心理カウンセラーに出会える医療機関の情報まで持ち合わせている人はとても少ないということがわかりました。

これらのことから、ゲイ・バイセクシュアル男性が性的指向を明らかにして心理カウンセリングを受けることができる相談機関および医療機関などの情報データベースの構築の必要性と同時に、実際に相談があったときに十分に対応ができるよう、性的指向やそれに関連するテーマについて心理カウンセラー自身が学んでいく研修プログラムの充実なども、今後必要であると考えられます。



## 第2章

# 質的データ

自由記述欄に寄せられた内容の分析

# 自由記述欄に寄せられた声を まとめるにあたって

本調査研究の質問票の最後に設けられた自由記述欄には、全研究参加者の約 32.1%に当たる 661 名が記述を行っていました。長文のメッセージも多く、原稿用紙数枚分に及ぶものもありました。この自由記述欄は、選択式の質問票に回答するだけでは表現しきれなかった思いを表出し、研究実施者に伝えたいという、研究参加者のニーズを受け止める役割を担ったことにもなると考えられます。

またその記述内容は、本調査に参加した感想や研究参加者が日頃考えていることなど、非常に多岐に渡っています。同じ質問票に回答しても、その感想や研究実施者に期待することは多種多様であり、HIV 感染の予防行動、自らの性的指向、メンタルヘルス、ゲイコミュニティについてなど本調査で取り上げたテーマに関して、一括りにはできない様々な思いや意見を持っていることがわかりました。

これらの記述の多くは、医学系の学術機関に所属する研究者や心理カウンセラーがこれらの記述を読むという前提があったことによって、研究参加者が自分の心情を吐露する上での安心感が生まれたことや、異性愛社会に対する自分たちの思いの代弁者としての期待が託されたことを推測させるものでした。私たちも彼らの強い思いに心を動かされ、是非とも多くの方に当事者の声を伝えたいと考え、ここに報告する記述内容の分析とまとめの作業を行いました。

この分析とまとめを行う過程には、自由記述内容のカテゴリー化と例文の抽出の作業が含まれています。その際の作業手順と留意点は以下のとおりです。なお分析の精緻さを高めるために、これらの作業では研究実施者間で相互に確認を行うプロセスを踏みました。

1. 自由記述欄に書かれた全ての内容を、9つのカテゴリーに分類しました。9つのカテゴリーとは、「本調査の技術面に関する指摘や批判」「本調査の内容・テーマ・意図への疑問や批判」「本調査への期待・要望・感謝」「本調査による心理面・予防行動への介入的効果」「研究展開への期待」「日頃感じていること」「情報提供の希望」「その他」「分類不可能」です。
2. この9つのカテゴリーそれぞれに含まれる全ての記述の中から、例文を抽出する作業を行いました。その際、似通った複数の記述については、代表性がより高いと思われるものを例文として残すようにしました。
3. 記述の幅広さをできるだけ忠実に伝えるために、類似していてもニュアンスが異なると思われるものは例文として残すこと、また多数意見だけでなく少数意見も取りこぼさないことに留意しました。
4. また例文抽出の際には、できるだけ研究参加者が原文で用いた表現を大事にするように心がけましたが、抽象性・一般性を高めるため、必要に応じて研究参加者の真意が歪曲されない程度に適宜修正を加えました。研究参加者の個人が特定される可能性が多少なりとも考えられる情報部分については、全て削除しました。
5. その上で私たち研究実施者が、これらの研究参加者の声をどのように受け止めたか、またそれに対する考察をコメントとして加えました。

なお、「その他」については特記すべき考察事項がないため、また「分類不可能」については記述の表現が曖昧で考察が不可能なため、例文・考察ともに記載していません。

# 本調査の技術面に関する指摘や批判

- 自分に該当する選択肢がなくても選ばなくてはならないことがあった。
- 選択肢が合わないところもあったので、もう少し細かい選択肢を作るか、全ての項目に自由記述のスペースがあると答えやすいと思う。
- ゲイに特有の言葉が非常にマニアックで、中にはわからない人もいるのでは？
- ネットで出会った人に自分の本名を伝えるかどうかは相手にもよるが、それを選ぶことができなかった。
- カウンセリングを利用するかどうかは、カウンセラーを信頼できるかどうかにもよるが、その点を反映できるような選択肢の構成ではなかった。
- 「周囲」という表現があるが、「周囲」のゲイの友達か、それ以外の「周囲」の人間かでは答が全く異なってくる。
- 過去6ヶ月のセックスの人数は覚えていないので、正確には答えきれなかった。
- ハッテン場に行っても、セックスをするとは限らないので、ハッテン場に行く回数を答えても、セックスの回数とは同じではない。
- 調査なので設問が多いのは仕方ないのはわかるが、それでも多すぎるのではないか。
- 質問項目によっては、回答が面倒だった。
- 場所によってはかなり地域が特定されてしまうので、郵便番号を入力するのは怖かった。
- 親と同居する者にとっては郵便番号は書きにくい。
- 郵便番号記入は大都市以外の地域に住む人にとってはプライバシーに関して配慮がないと思う。
- 質問内容と選択肢が一致しないのが多い。

技術的な問題に関してさまざまな指摘がありましたが、質問票の長さや選択肢の多さというような指摘よりも、むしろじっくりくる選択肢がない、もっと各人の状況にあわせた選択肢を作って欲しかったというような意見が多く見受けられました。これは、本調査において主に採用した選択式の質問項目だけでは、研究参加者が自分の思いや状況、行動を表現しきれなかった、あるいは彼らはもっと自分の思いを厳密に表現したい気持ちを強く持っており、質問票はできる限りその気持ちに沿って欲しかったということではないかと思えます。

じっくりこなかった点に関する記述としては、「本名を伝えるかどうかは相手にもよること」「カウンセリングを利用するかどうかはカウンセラーを信頼できるかどうかによること」「周囲という言葉は、周囲のゲイの友達か、それ以外の周囲の人間かで答えが全く異なること」など、時と場合によっては回答が異なるということや、「過去6ヶ月のセックスの人数は覚えていない」「ハッテン場に行く回数を聞かれても、セックスの回数とは同じではない」「カミングアウトの人数は数えきれない」など、もっとそれぞれの気持ちや行動を理解して欲しいということなどでした。その他には、「郵便番号の入力について親と同居の者や、大都市以外の地域に住む人に関しては配慮がないと思う」「プライバシーについて配慮が欲しい」など、守秘に関する不安を訴えるものもありました。

一見技術的な部分に対するコメントと思われるものからも、それぞれの研究参加者の思いを汲み取ることができます。郵便番号の入力によって、個人が特定されることを強く恐れる研究参加者が見られました。この恐れは、郵便番号のような限られた情報からでも、自分の性的指向について誰かに知られてしまうことの不安の表れだと推測できます。今回の調査で郵便番号を記入する欄を設けたことには、重複回答のスクリーニングや地域分布の明確化といった理由がありました。とはいえこのような守秘に関する不安については、調査研究だけでなく保健・医療・福祉機関や教育現場等で実際彼らからの相談を受けられる際にも、特に配慮する必要があると言えるでしょう。

なお、質問文や選択肢の言葉遣いの不具合についての指摘もありましたが、これに関しては一部標準化された心理尺度を用いる必要があったという事情のため、方法論上止むを得ない面もあったと考えられます（使用した標準化された心理尺度については、2～3ページの研究方法に詳細に記してあります）。

# 本調査の内容・テーマ・意図への疑問や批判

- ・抑うつ傾向を問う項目が多くあったが、このような質問をされること自体、ゲイにラベリングがされているように思えて腹立たしい。
- ・ゲイにはカウンセリングが必要なくらい病的な人間であるかのように考えられているような気がするが、ゲイの多くは全く正常な人間だと思う。
- ・ゲイであることをオープンにしている自分のような人間が想定されていないような気がした。みんなが世間から隠れて生きているわけではない。
- ・全体的に、ゲイが社会から疎外されていたり、自分を卑下していたり、悩んでいることが前提となっているように感じた。
- ・若いゲイだけを対象に作られているように感じた。
- ・ゲイやノンケだけでなく、それ以外にも色々な性のあり方があることを酌んだ質問項目にしてほしい。
- ・ノンケの人が作ったアンケートのように思われるが、ゲイの何を知らうとしているのかわからなかった。
- ・ゲイの人が自分の興味本位で作ったアンケートではないか。
- ・セックスについての項目が多かったが、ゲイは別に男性にセックスばかりを求めているわけではないということが、アンケートを作った人には分かっていないような気がした。
- ・セックスに色々なファンタジーを持っているのは、ゲイだけではないと思う。
- ・アンケートに答えているうちに、「ゲイは HIV の感染源である」と言われているような気がしてきた。
- ・ゲイ = HIV 感染のリスクが高いという認識自体が差別的である。
- ・ヘテロセクシュアル社会からのストレスをオープンにしていって解消しようとしているゲイの行動をとらえていない。

本調査の内容・テーマ・意図などについて、多くの批判や疑問が寄せられました。コメントの内容からは、腹立たしさや「とにかく一言言っておきたい」という思いが伝わってきます。彼らの批判や疑問の内容を大きく分けると、①決め付け、ラベリングされたように感じる、②研究実施者が自分たちに対して公正な認識を持っているのか疑問、③このような調査がなされる意図や意義が理解できない、ということのように思います。

①については、ゲイ・バイセクシュアル男性は精神的に不安定で、セックスについて特別なファンタジーを持っている、あるいはHIV感染の可能性が高いなどの「ラベリングがされているのではないかと感じる」というような内容でした。②については、一部のゲイのみを対象とした設問でしかないように感じられて、ゲイ・バイセクシュアル男性の全体像をきちんと理解していない人がアンケートを作成したのではないかと疑問や、色々な性のあり方があることを酌んだ質問項目にして欲しいなど、「もっと幅広い視野にたった質問票を作って欲しかった」という内容のものが寄せられていました。③については、ゲイ・バイセクシュアル男性の何を知らうとしているのかわからない、興味本位で作ったアンケートではないかというように、質問票の意図そのものへ疑問を持っているというものが多く寄せられました。

これらのコメントは、「懸命に生きている自分たちに刃を向けられた」というような憤りとして表現されており、安易な意図や興味本位で自分たちに質問をして欲しくないというメッセージが発信されているように思われました。言い換えれば、自らの性的指向を受け入れ、自分らしく生きるために積み重ねてきた努力が理解されなかったように感じた不快さの表明とも考えられます。

不用意にメンタルヘルスや性について話題にすることは、ともすると彼らが常日頃から異性愛社会の中で感じている窮屈さを彼らに再体験させることになりかねないということを、これらの記述を通して研究実施者である私たちも改めて考えさせられました。彼らの心理的苦悩や性文化のあり方を全体の傾向として理解しておくことも重要ですが、対人援助職として彼らに関わる上では、その程度には個人差があることや、これまでの人生上の努力に基づいた自負を持っていることも尊重していく姿勢が大切だと考えます。



# 本調査への期待・要望・感謝

## ●本調査への感謝・研究テーマへの賛同

- ・非常に楽しくさせていただきました。
- ・どきっとする内容の質問もあり面白かった。
- ・久しぶりに自分のことを正直に語れた気がして、よかった。
- ・初めてこうしたアンケートに答え、いい勉強になりました。
- ・自分の回答が、何かの参考になれば幸いです。
- ・少しでもお役に立てればと思い、参加させていただきました。
- ・こうした調査はぜひとも必要と思う。どうか大切に取り組んで下さい。切なるお願いです。
- ・応援しています。これからも頑張ってください。
- ・今後もこうした調査には積極的に協力していきたいと思います。
- ・もっとこういう機会が増えてほしい。
- ・個人的にやっているページにリンクを張らせてもらってもいいでしょうか。少しでもみんなに考えてもらえるきっかけになればいいなと思います。
- ・私に協力できることがあれば、メールをいただければと思います。
- ・画期的だと思う。
- ・かなり正確な実態が判明する調査だと思う。
- ・HIVや性感染症が広がらないように、ゲイについてこのような研究がされるのは、非常に有意義だと思う。
- ・HIVについては多くの研究者やグループが研究されているかと思いますが、ゲイとの関連をまじめに研究に取り組まれているのはまれだと思います。
- ・自分はメンタルケア機関にアクセス可能だが、地方に住むゲイにはそのような機会はほとんどないと思うので、このような試みには大いに賛同する。
- ・若い時からこうした研究や取り組みを切に望んできました。ようやくそうした時代がやってきたのだなと嬉しく思います。
- ・色々な方々が同性愛者に対して理解を深めようとしてくれてとてもうれしいです。
- ・僕たちはもっと理解してもらいたいと、切に願っています。
- ・同性愛に対して学術的に調査していただけるのは、ありがたいことだと思います。
- ・日本でも同性愛者について研究の目が向けられはじめていることがうれしいです。
- ・一般の人からこのようなアンケートがされるのはとても大事だと思うし、嬉しかった。
- ・よく調べてあるのがわかる。頑張って調べたのですね。

先の「本調査の内容・テーマ・意図への疑問や批判」でまとめたように、調査に「答えることそのものが苦痛」であったり「批判的に感じた」という記述があった一方で、研究参加者として質問票に回答する過程自体を楽しみ、自分自身やHIVその他の性感染症の感染予防について考えるという意味を見出したという記述が少なからずありました。そして多くの研究参加者が、このような研究が1回きりの調査で終わるのではなく継続的に行われることや、自分たちの性的健康やメンタルヘルスが向上するための具体的な働きかけが積極的になされることを望んでいます。そしてその実現のためなら、ただ受身的に介入を求めるのではなく、自らも協力を惜しまない気持ちを持っていることが窺われました。

また、性行動やメンタルヘルスについてなどのテーマ設定に対する関心の高さや、このようなテーマ設定のもとに介入の対象とされることを求めていることが推測されました。学術機関に所属する調査実施者が本調査を行ったことによって、「興味本位ではなく学術的な関心のもとに、自分たちに対する理解を深めようとしている」ということが伝わった結果、研究に対する肯定的な反応も生じたようです。異性愛社会の中で、無理解による居心地の悪さや憤りを感じている研究参加者にとっては、今回の調査は非常に新鮮なアプローチとして受け止められたと考えられます。

ゲイ・バイセクシュアル男性を対象とした調査研究を行う上では、ニュートラルに、ありのままに彼らを理解しようと歩み寄る研究者の姿勢が求められると考えられます。そしてこの姿勢は研究者のみならず、保健・医療・福祉・教育の各現場において、彼らと接する機会のある対人援助職にも共通する姿勢であると言えるでしょう。

## ●本調査への期待・要望

- ・アンケート結果などを公表していただきたいと思います。
- ・調査結果、解析結果に興味があります。
- ・データの解析結果等は今後何らかの形で私たちの目に触れることはあるのでしょうか。どのような形で活かされるのか、具体的に知りたい。
- ・このようなアンケートがされても、大多数の場合回答した自分たちにフィードバックされることがない。
- ・ネット上で結果を見ることができるリンクや、次回アンケート予告などにも是非力を入れてほしいと思います。
- ・ゲイの社会的地位の向上に、研究が役立ちますように期待しております。
- ・いろいろな考え方・多様性を差別や誤解のないように社会が受け入れられるように、ゲイについての研究を進めてほしいです。
- ・社会から同性愛者について何らかの理解が広がれば、という思いで参加しました。
- ・同性愛者の人が胸張って生きてゆける社会の実現を希望しています。
- ・研究報告書だけでこのアンケートを終わらすのではなく、同性愛者をサポートできる、形のある結果を生み出すことを心よりお願い申し上げます。
- ・同性愛者が守られる社会作りの役に立つといいです。
- ・ゲイの人がストレートの人と全く同じように暮らせる日々が来ることを願い参加しました。
- ・アンケートを役立てて、セクシュアルマイノリティの力になってください。
- ・私たちのゲイライフによい影響を与えてくれることを祈っています。
- ・研究の成果が出て、はやく助けてください。体も心もボロボロです。いつ死んでもおかしくないです。
- ・日本でセクシュアリティに関する論議や、論文や学会発表が盛んになり、ゲイ研究自体が偏見無く認められるよう、頑張ってください。
- ・このアンケートを通して、私たちの生活が劇的に良い方向に変わるとは思わないが、何もしないよりはいいと思って参加しました。
- ・このような研究の結果が調査された方の意図とは逆に、マイノリティ差別に使われないことを希望する。
- ・性的指向に関係なく、もっと多くのメンタルケアを気軽に行ってくれるような場が増えるようにしてほしい。それにつながるような研究発表と提言を。
- ・この調査が、人が人を愛する礎になれば嬉しい。
- ・僕のようにゲイとして生きることには否定的である人もいます。お願いなのですが、ぜひ僕のような声にも耳を傾けて研究を続けてください。
- ・このようなアンケートに出会うことで、悩んでいる多くのゲイの人たちを支えることになると思います。
- ・予防も大切だと思うので協力はしたいと思っていますが、感染した者のケアも忘れず考えつづけていっていただきたいと思います。
- ・偏見なく予防や治療ができる日本であってほしいと思い、アンケートに参加した。

非常に多くの研究参加者が、本調査の集計結果を知りたいという記述をしていました。自分以外のゲイやバイセクシュアル男性がどんなことを考えているのかを知りたいという気持ちを強く持っているのでしょう。また、過去にもこのような調査に協力したものの、その結果のフィードバックがされず自分たちの利益につながらなかったという体験をして、搾取されたような思いを残している人もいました。このような調査をもとにして HIV 予防などの介入を意図する側と、介入されるゲイ・バイセクシュアル男性との間に、信頼感をもとにした協力関係を築いていくためには、研究実施者が調査結果をどのように受け止め、それをどのような形で対象の利益還元を生かそうとしているかを、個々の研究参加者やゲイコミュニティに対して明示していくことが重要だと言えるでしょう。

このコミュニティへの還元に関する要望の中で非常に大きかったのが、自分たちが置かれている状況が改善されることでした。多くの研究参加者がこの調査結果をもとに、一般社会における性的指向の多様性への理解を促進してほしいと望んでおり、研究実施者には彼らの思いの代弁者としての役割の期待が寄せられています。中には「はやく助けてください」という切羽詰まった SOS の声もありました。異性愛社会に対して「生きにくい世の中だ」「差別・偏見の対象にされている」「存在が認知されていない」という思いを抱きながら、毎日の生活を窮屈に送っている彼らの様子が伝わってきます。1 人でも理解者が増えること、またいつの日か社会全体が性の多様性に関わることへと変わることを、彼らは切実に願っていると言えるでしょう。そして性的指向に関わらず、社会全体のメンタルヘルスが向上することや、先入観を持たずに他者に対しての温かい関心が高まるような社会作りという、より大きな希望の実現を望む声も寄せられました。

一方、自らの性的指向に強い葛藤を感じている研究参加者からは、その葛藤を酌んだ研究の継続・実行を望む声が寄せられました。近年、特にコミュニティベースの予防介入においては、性的指向や同性同士のセックスを非常に肯定的に捉えたメッセージと絡めて、感染予防を呼びかける活動が盛んです。しかし、自らの性的指向に対する葛藤が強いゲイやバイセクシュアル男性には、このような予防のメッセージは違和感をもって受け取られる可能性があります。性的指向に対する肯定度の個人差をも視野に入れた多層的な予防介入が求められていると言えます。

また、実際に感染した人のケアも充実させてほしいという声が届けられました。これは、HIV の感染予防が強調されること、「HIV 陽性者の撲滅」というメッセージになってしまうかという懸念の表れかも知れません。ゲイコミュニティでの予防介入や教育現場でのエイズ教育を行う際にも、HIV 感染予防を強調することによって感染者への社会的スティグマを強めるようなことにならないよう配慮しながら、予防行動の重要性を伝えることが求められていると考えられます。